

科目名 Subject Name		開講年次	開講学期	曜日・時限
臨床栄養学概論 Introduction to Clinical Nutrition		2年	通年	月曜日 3時限、火曜日 4時限
単位数	授業の形態		授業の性格	
4単位	講義	選択 (栄養士資格必修)		
当該科目の理解を促すために受講することが望まれる科目				
解剖学、生理学				
同時に履修しておくことが望まれる科目				
栄養士資格取得に必要な科目				
担当者に関する情報				
氏名	研究室の場所	オフィスアワー	電話番号・メールアドレス	
穂積 元	福祉棟2階 研究室	月曜から木曜午前 (授業時間を除く)	授業中に指示します	
授業の概要				
近年、社会環境、疾病構造等の変化により生活習慣病が問題になっている。本教科では解剖学や生理学の基礎知識を基に各病態を理解し、日常の医療現場でどのような治療や診断方法が行われているかを学習する。また、治療法、とりわけ食事療法について、病態を理解してその食事療法の有効性を(医学的根拠)を体系的に学ぶ。				
授業の到達目標				
①各疾患の病態がどのようになっているのか的確に理解できるようにする。それにより各種療法の意義を考えることができるようにする。②疾患の病期や重症度の診断基準を習得し、どの段階からどの療法が中心となるのかを理解できるようにする。③各種栄養法の特徴を習得し、栄養サポートチームの役割などを知ることができるようにする。				
授業の方法				
講義形式で実施する。授業の最初に復習として関連科目の基礎知識について無作為に口頭試問を実施する。その後、教科書やOHPの提示で解説していく。				
学習の成果				
①各疾患、とりわけ生活習慣病の成因や重症度、診断基準などが理解でき、その病態にあった各種療法の有用性を知ることができる。また、そのことから栄養指導の客観的な判断の根拠を習得することができる。②各種栄養法とその特徴を理解することができる。また、現代社会において実施されている栄養サポートチームの役割や在宅栄養の実態を知ることができる。				
授業のスケジュールと内容				
第1回目	講義ガイダンス(成績評価法、学習方法)			
第2回目	臨床栄養の概念と意義、新しい目的概念			
第3回目	医療におけるNST(栄養サポートチーム)の登場の背景、これからの栄養士に求められているもの			
第4回目	栄養アセスメントの概念とその方法			
第5回目	代謝性疾患1(糖尿病の病態、病型、診断基準)			
第6回目	代謝性疾患2(糖尿病の合併症)			
第7回目	代謝性疾患3(糖尿病の各病期と病態、食事療法の適応)			
第8回目	代謝性疾患4(糖尿病における薬物療法)			
第9回目	代謝性疾患5(要経管栄養患者における栄養法)			
第10回目	腎臓疾患1(慢性腎臓病の診断と治療、糸球体腎炎、ネフローゼ症候群)			
第11回目	腎臓疾患2(各種病態と薬物療法)			
第12回目	腎臓疾患3(人工血液透析-血液透析、腹膜透析)			

第13回目	腎臓疾患4(各種病態と食事療法)	
第14回目	腎臓疾患5(透析食とその特徴)	
第15回目	前期のまとめと中間試験(前期範囲より出題、国家試験形式の五者択一形式)	
第16回目	消化器疾患1(肝臓疾患-ウイルス性肝炎、肝硬変、肝がん、脂肪肝)	
第17回目	消化器疾患2(胆嚢・胆道系疾患-胆石症、胆嚢炎、胆嚢がん、閉塞性黄疸)	
第18回目	消化器疾患3(膵臓疾患-膵臓炎、膵臓がん)	
第19回目	消化器疾患4(胃腸疾患-胃炎、胃がん、十二指腸潰瘍、クローン病、大腸がん)	
第20回目	循環器疾患1(動脈硬化症、高血圧症)	
第21回目	循環器疾患2(心不全、冠動脈疾患、脳血管障害)	
第22回目	血液疾患(貧血の分類、栄養性貧血)	
第23回目	代謝性疾患6(脂防代謝異常症)	
第24回目	代謝性疾患7(タンパク代謝異常:痛風、カルシウム代謝異常:骨粗鬆症)	
第25回目	代謝性疾患8(肥満、メタボリック症候群)	
第26回目	内分泌疾患(甲状腺機能疾患)	
第27回目	アレルギー疾患(分類と機序、食物アレルギー)	
第28回目	各種栄養法1(各種栄養法とその特徴)	
第29回目	各種栄養法2(経管栄養法の現状)	
第30回目	後期のまとめと後期試験(後期範囲より出題、国家試験形式)	
成績評価の方法と基準		
評価の領域	割合	評価の基準
授業参加態度	20%	最高評価は授業に集中し、必要なことはきちんとノートにとる。また、分かりにくい点があれば積極的に質問する。
レポート		
調査報告書		
小テスト		
中間・学期末試験	70%	中間試験および後期試験も35点満点で合計70点とする。試験形式は管理栄養士国家試験と同じく五者択一問題とする。
発表内容(態度含む)		
その他	10%	授業中に関連した基礎知識に関する口頭試問に対して、しっかり回答することができる。
教科書と参考図書		
教科書:「新しい臨床栄養学」 後藤・瀧下 共著(南江堂) 参考資料は適時配布をする。		
履修上の心得・ルール		
関連科目(解剖学・生理学等)の予習・復習をして受講すること。		